

[解説]

日本の IS 研究と世界へのその発信

小坂 武

要旨

日本は内向きである、と最近しばしば耳にする。それは学術研究分野においても指摘されている。我々が関与する情報システム研究分野も例外ではない。AIS 関連の国際会議で日本人研究者による研究発表は極めて少数となっている。筆者は自身の経験と関連情報をまじえ、一般にいわれる状況が情報システム研究分野でも発生していることを報告する。そして、筆者らが最近行った実証研究に基づいて、研究関心が国内と海外では異なること、国内で研究実績を作れる実質的な制度があることなどに言及し、海外発表への動機付けが低くなっていると指摘する。このような現状に符合して、海外での発表にはその努力や労力を上回る効用があることが充分理解されていない可能性があるとする。海外での発表が有する効用について、多様な研究者ネットワークを構築できるだけでなく、主流や時流でない研究でも充分議論がされ、関連する深い知見が得られることなどを自身の経験を踏まえ筆者は紹介し、そして最後に海外での発表を推奨している。

1 はじめに

日本人による情報システム研究の海外での発表は数が少ない。しかも、中国人や韓国人の研究者の増加などで日本人の研究発表の国際学会におけるプレゼンスは相対的にも低下しつつある。そのため、若手研究者に対して経営情報学会 (JASMIN) では海外発表を助成しているほどである。近年、日本は世界から孤立していると言われる。ガラパゴス化という言葉さえ聞かれる。例えば、日本のケータイはガラパゴス化していると。ケータイ市場が閉鎖的で海外メーカーの参入が容易でないばかりか、国内メーカーの海外シェアを合計しても、韓国のメー

カ 1 社のシェアに届かないことにそれが現れている。

これはケータイやパソコン分野だけに限った現象ではない。日本文明そのものが孤立的だとの指摘もある。“文明の衝突”を著したハンチントン^[9]は、日本は 5 世紀頃にシナ文明から独立した独自の文明圏であるという。「世界の主要な文明には二ヶ国以上の国が含まれるのに対し、日本文明は世界の中で一国だけからなる文明だ」と指摘する。日本は孤立しており、それが日本の独自性だとの指摘であり、それは説得力があるように聞こえる。

海外での日本のプレゼンスの低さを捉えて、国際交流センター理事長の山本正^[10]は、国際的な場に出て対話しようという人も軒並み減っていると次のように指摘する。「もっとも深刻なのは、そもそも国際的な場に出て対話しようという人が政治家も経済人も学者も軒並み減っていることです。」

果たして、我々、日本に住む日本人による IS 研究ではどうだろうか。ジャーナル論文が

Takeshi Kosaka

東京理科大学経営学部

School of management, Tokyo Univ. of science

[解説] 2009 年 5 月 12 日受付

© 情報システム学会

少ないだけでなく、その前提となる国際会議発表者が極めて少ない。

2 ソシオ・テクニカル視点では

この状況を筆者の研究発表の場での経験を通じて見てみよう。筆者の研究はソシオ・テクニカル視点での IS 研究で、日本では少数派である。これまで日本の会社は社会でもあったため、ソシオ・テクニカル視点が優良企業において自然と実践されてきた。そのため、日本では当然視され、あまり議論が起こらないという現実がある。それに対して、西欧ではこれが IS 研究の重要なテーマである。例えば、iadis (International Association for Development of Information Society) の IS2009 国際会議はその CFP (Call for Paper) に「ソシオ・テクニカル視点を取り入れた IS を議論する場を提供することを目的とする」とある。

国際会議の一つである PACIS (Pacific Asia Conference on Information Systems) が開催される太平洋アジア地域だと、発展途上国が多いこともあり、まだまだ指示命令・報告を基本とする階層型組織の考えが支配的である。そのため、ソシオ・テクニカル視点には関心が低い。それに対し、先の iadis をはじめ欧州ではソシオ・テクニカル視点の場の提供がしばしばである。また、欧州は少数派を大事にするところがあり、どのような分野でも議論が盛んである。このような事情から、海外での発表が筆者にとっては自然な成り行きである。

3 情報システム関係の国際会議

情報システム関係の国際学会は AIS (Association for Information Systems) 関連のものが多い^[4]。それ以外では、先に取り上げた iadis 等が開催する国際会議などがある。AIS 開催による、参加国ベースで最大の国際会議は ICIS (International Conference on Information Systems) である。また、AIS 関連の会議 (AIS affiliated conferences) には、ほぼ地域に対応した AMCIS (Americas Conference on Information Systems), ECIS (European Conference on Information

Systems), MCIS (Mediterranean Conference on Information Systems), PACIS がある。さらに開催主体は国ベースであるが、世界から発表者が集まる英国の UKAIS (The United Kingdom Academy for Information Systems), 開催主体がオーストラリアを中核とする ACIS (Australasian Conference on Information Systems) などがある。

筆者は、AIS 関連では ICIS, MCIS, PACIS, ACIS, UKAIS などで発表してきた。一昨年までは、PACIS で数年間毎年発表し続けた。また、直近の 12 ヶ月間では、MCIS2008 (チュニジア), aidis の IS2009 (スペイン), PACIS2009 (インド) において、すなわち欧州・アフリカ地域で 2 回、太平洋アジア地域で 1 回発表した。しかし、そのどの国際会議にも、筆者以外の発表者はほぼゼロないし 1, 2 名であった。このような筆者の経験に基づくならば、日本人の海外での IS 研究発表は中国系や韓国人等に比べ極めて少ないといえる。少なくとも本学会 (ISSJ) 会員と JASMIN 会員で見たとき、AIS に関連した国際会議での発表は極めて少数で例外的だとさえ言わざるを得ない。しかもその発表者はほぼ固定している。このような状況は既に小坂武^[6]によって経営情報学会誌で、また松本秀之^[7]によって本誌で報告されている。

それに対し、中国系の人や韓国人の発表は数多くのセッションに見られ、彼らのプレゼンスの大きさに常々感心する。また、PACIS 関連では、PAJAIS (Pacific Asia Journal of AIS) が 2009 年から発刊されるが、その編集委員に日本人の名は無く、中国系や韓国人の多さに改めて感心する。

しかし、ここでいう中国系とは中国国内の研究者ではなく、香港、シンガポール、さらには豪州や米国に在住する中国人、いわゆる華僑・華人の研究者を指している。この割合について、正確なデータを筆者は有しないので、元 AIS 会長の話でそれを代替しよう。当時 AIS 会長であったデービッド・アビソンとは MCIS2008 で昼食と夕食を共にし、まとまった話をする機会があった。彼は中国で開催された

PACIS2008 に AIS 会長として参加し、「中国系の発表者が極めて多い状況に遭遇したが、中国本土の研究者による発表はまだまだ少ないことに気付いた」と言う。ここからも、世界で活躍する中国系の研究者のプレゼンスが高いということがわかる。

4 論文誌編集委員としての経験から

筆者が AIS 会長の彼と話しをする機会に恵まれたのは、珍しい日本人発表者という立場を利用したものではない。情報システム分野の欧州ジャーナルとしてトップの評価にある ISJ (Information Systems Journal) の編集委員を筆者が永く長く担当しており、そして彼がその編集長であることで、面識があるためである。

国際学会の発表者に日本人 IS 研究者が不在である表面的な理由は論文採択率の低さにあると考えられる。IS 関係の国際会議での論文採択率は約 30%~約 10%、競争率にたとえれば約 3 倍~約 10 倍となっている。国内の全国大会では、発表がほぼ実現する状況にあるのと比べると大きく異なっている。ブラインド審査が 2 名以上で行われ、かなり厳しい査読となっている。先に触れた AIS 会長も ICIS2008 に論文投稿したが、採択されなかったことが AIS の学会 Web に掲載されている²⁾。

昼食のおり、その話を私は彼に持ち出したところ、big name(有名人)かどうかは採択に全く関係なく、純粋に論文内容によると話していた。そして、IS 分野の国際学会の審査がフェアであることが予期せずして実証されたと同席したベルギー人の研究者が話していたのが思い出される。

この審査の公平さと審査の厳しさは、別な問題を生んでいる。厳しいブラインド審査が行われているため、発表に十分な本数の投稿論文が集まらないことがある。例えば、iadis の IS2009 では 182 本の投稿があったが、フルペーパーとして採用されたのは 45 本で、採択率は 25%以下とプロシーディングスは記述している⁴⁾。事実、最初の CFP は 2008 年 11 月下旬であったが、しばらく 2nd CALL をしていた。また、2009 年 7 月にインドで開催され

た PACIS2009⁸⁾の CFP でも提出期限が延期された事実がある。

研究発表ではないが同様な現象は、IS 特集号を初めて出版した JASMIN の経営情報学会誌でも昨年経験した。筆者はその IS 特集号のゲスト・エディタ⁹⁾を担当したが、論文投稿は相当数あったものの、残念ながらその多くは審査に通らなかった。それで、論文募集期間を延期したことを憶えている。

表面的には、採択率の低さが日本人発表者の少なさと関係していると考えられる。しかし、それはこの IS 研究分野の学問が成熟していないためとも考えられる。というのは、工学分野の国際学会では日本人発表者が不在という状況は無いと聞くからである。また、前記の特集号の投稿論文の多くが自説の展開に終始していたことから、審査に通過しなかった。それは研究手順や執筆手順がまだ充分共有されていないことを示唆し、IS 研究が成熟していないことを含意する。

5 発表が少ない根本的な理由

発表が少ない、より根本的な理由は何であろうか。表面的な理由でなく、構造的なあるいは深い理由があるのではないだろうか。先に触れた PAJAIS ジャーナルに、佐藤修先生、ポール・ターナー先生と筆者の共著で、“日本の IS 研究発表”の研究を論文化したものが掲載される¹⁰⁾。その研究成果に若干触れることで、プレゼンスの低さを続けて議論する。

我々はその論文において、ISSJ や JASMIN での研究テーマが経営や技術に幅広く分布しており、IS 研究が相対的に少ないことを、全国大会やジャーナル論文の分析から明らかにした。すなわち、日本人の研究関心と他国のそれとの間に広さと深さで違いがあった。それは日本の独自文明の一端を担っていることを現している。また、その研究のために行った国内の研究者へのインタビューからも、海外での発表が時間とコストの観点から見合わなく、国内の研究市場で自給自足しているとの認識があることも判明した。日本国内では、ISSJ だけでなく、JASMIN が年 2 回の全国大会を開催

していることから、わざわざ海外へ出張し発表する価値を多くの研究者は認めていないと考えられる。また、表面的に英語が高いハードルだとの意見も聞かれるが、学位を海外で取得した研究者も国内での発表に留まることが多いのはそのことを裏付けている。

また、国内の全国研究発表大会では予稿集の論文が 4 ページ前後であるが、海外では 10 ページ前後のものを英文で書かなければならない。その負担の大きさもブレーキ要因と考えられる。

今日、国内の大学においても研究業績を上げるよう教員にプレッシャーをかけている。このことと、研究業績を上げる上で、IS 分野では国内に自給自足市場があり、また研究関心の違いが、国内に止まることを後押ししていると言えよう。

6 海外発表の有用性

研究業績を上げるうえで、国内市場で充分との認識があることを概観した。それでは、海外での発表には魅力やインセンティブが無いのであろうか。このような記事を執筆するようにとの本学会あるいは編集長からの依頼は、海外でのプレゼンスを高める必要があるとの学会首脳部の考えを反映していると考えられる。プレゼンスの大きさは国レベルの話であるが、研究者にとって興味があるのは、国際会議での発表の有用性であると考えられる。そこで、研究者にとっての海外発表の有用性などについて、筆者の経験を踏まえて、最後に若干触れる。

まず、ブラインド・レビューで有益なコメントが、しかも複数人から得られることを指摘したい。たとえ、採択されなくとも研究を深化させられる貴重な情報が得られる。欧米などでは、流行の研究テーマばかりでなく、新しいものを育てようとする潜在意識があるように、彼らの言動から認識できる。そのため、発表では多様な議論が交わされ、また査読では複数人から充実したコメントが寄せられる。研究を進める上で異質な意見を入手したり聞いたりすることができ、研究を深化させるうえでそれらは一度経験すれば貴重だと理解できるものである。ま

た、新たな視点も得やすい。特に、欧州では哲学的側面を重視するため、新たなあるいはより本質的な視点を得る上で、長時間のフライトは問題とならないと筆者は実感している。

7 おわりに

国際学会の投稿論文の執筆には、若干のテクニックがあると筆者は経験から理解している。それを最後に述べておく。採択されるには、テーマや内容を絞り込んでいること、正統的な研究手順に従っていることが重要である。会議論文の長さは日本のそれに比べ 2 倍以上であるが、欲張ってはならない、多くのことを展開してはならない。そして、研究手順を踏むということが重要であるのは、既存研究を充分吟味してそれを批判、あるいはそれに基づいて改善・発展するということが重要だということの意味している。独自の意見だけを展開しても採択されることはないことを知っておきたい。

日本文明は孤立していることを、筆者は本稿を執筆しながら、IS 分野でも確認することになった。しかし、グローバル化した現在、孤立しているだけでは、我々は生存できない。孤立した文明は、見方を変えれば独自の文明や研究であると捉え直すことができる。

例えば、iadis の IS2009 では、英国の研究者が米国 IBM 社と日本ブレーキ社の事例を取り上げて、社歌（朝などに会社で合唱する歌）と IS 研究との関係を発表していた。筆者はたまたまそのセッションに同席した唯一の日本人であった。そのため、筆者は誰よりも先に意見を述べた。story telling 効果が社歌にはあり長期的に会社を社会にできる効用があると、最初にコメントをした。そこから議論は各国の人々の発言に結びつき、研究の有用性や妥当性が検証されたのであった。このように独自のものであっても、発表あるいはコメントすれば、自分自身だけではなく、海外の研究者にも新たなユニークな視点を提供あるいは発掘でき、相互に有益な会議参加となる。最後になるが、本稿が多くの方々に海外に飛翔していただくきっかけになることを願っている。

参考文献

- [1] AIS affiliated conferences:
<http://home.aisnet.org/displaycommon.cfm?an=1&subarticlenbr=34> (2009/9/10)
- [2] AIS President's Message in Web site for Association for Information Systems, Sept.2008: <http://home.aisnet.org/displaycommon.cfm?an=1&subarticlenbr=533> (2009/9/10)
- [3] ハンチントン, サミュエル, P.(著), 鈴木主税(訳), 文明の衝突, 集英社, 1998.
- [4] Isaías, P. and P. Powell, "Forward," Proceedings of the Iadis International Conference on Information Systems, 2009, p.xi.
- [5] 小坂武, "特集号「ソシオテクニカル・アプローチと情報システム研究」," 経営情報学会誌, Vol.17, No.3, 2008, pp.1-5.
- [6] 小坂武, "PACIS2004 へ出席して," JASMIN newsletter, Vol.13, No.2, 2004, pp.155-157.
- [7] 松本秀之, "ヨーロッパに於ける情報システム学会の動向," 情報システム学会誌, Vol.2, No.1, 2007, pp.29-32.
- [8] PACIS2009 : <http://www.isb.edu/citne/pacis2009/index.html> (2009/9/10)
- [9] Sato, O., T. Kosaka, and P. Turner, "Information Systems Research and Academic Societies in Japan," Pacific Asia Journal of the Association for Information Systems, 2009 (to appear).
- [10] 山本正, "内向き日本, どうかえますか," 朝日新聞, 2009/3/2.

著者略歴

東京理科大学経営学部教授。経営情報システム分野担当。MBA (慶應大学), 工学博士 (上智大学), システム分析とシステム設計のソシオ・テクニカル視点での方法論の開発, 情報システムと経営システムの相互作用, 情報システム実施の社会・文化的側面などに関心を有する。著書「意思決定支援システム」で日本経営協会より経営科学文献賞受賞。元経営情報学会理事。経営情報学会誌, Information and Management 誌, International Journal of Technology Management 誌, Pacific Asia Journal of the Association for Information Systems (PAJAIS) 誌などに論文を発表。ICIS, PACIS, MCIS, ACIS, iadis IS 等の国際会議で研究論文を発表。情報システム学会誌の編集委員, 経営情報学会誌の編集委員, Information Systems Journal (London) の editorial board.